加太越奈良道の研究と現地踏査

Field work and Study on *Kabutokoenaramichi*

鎌田　道隆*・安田真紀子**
Michitaka Kamada・Makiko Yasuda

(一) 史料「加太越奈良道見取絵図」

加太越の奈良道は、東海道の関宿から奈良へ入り、暗峠越えで大坂へと結ばれる街道である。もう少し詳しく、江戸時代の姿で紹介すると、伊勢国の関宿西の追分けから東海道と分岐し、西へ進んで加太(かぶと)をこえて、伊賀国へ入り、伊賀上野の城下を抜けて、山城国東南部をかすめて大和国の奈良に達する。加太越奈良道と称されるが、街道は奈良から大和国と河内国境の暗峠をこえて、河内国松原から摂津大坂の玉造口に至っている。主要街道である東海道の関宿から京都を通過しないで、伊賀上野・奈良を経由して大坂にいたるバイパスと見ることもできる。

近世の加太越奈良道に関する基本資料は、その他の主要街道と同じく、東京国立博物館に架蔵される『五街道其外分間見取延絵図』であり、その中の「加太越奈良道見取絵図」である。『五街道其外分間見取延絵図』は、江戸幕府の道中奉行管轄のもとで作成されたものと伝えられ、寛政・享和の18世紀最末期ころから19世紀初頭にかけて実地測量や調査がおこなわれ、文化年間に完成したとされる[1]。しかし、関東地方から近畿地方にかけての25街道にわたる実地の測量や調査は広域のため、街道によっては調査から絵図の調製までが、早い着手から完成が遅れるものなど時期に前後するものがあった。実際に「加太越奈良道」の場合、享和3年（1803）の5月から7月に街道調査の役人が藤堂藩を訪れ、藤堂藩側で応対していることが、『庁事類編』などの史料から判明している[2]。

『五街道其外分間見取延絵図』は児玉幸多氏の監修によって、東京美術社から『五街道分間延絵図』として全103巻にまとめられ、絵図の復刻と解説研究が出版されている。該当の「加太越奈良道見取絵図」は、かつて本学の文学部史学科非常勤講師として学生の指導にも熱心にあたられた久保文武氏が、当街道の調査をすすめられ、解説・執筆にあたられている。久保文武氏の永年にわたる調査と研究は、街道だけでなく、遠近の集落や寺社・史跡などにも及んでおり詳しい。加太越奈良道研究の業績としては高く評価されてよい[3]。

平成17年9月2日受理　*文学部史学科教授　**奈良大学非常勤講師

（二）江戸時代における加太越奈良道の利用

当街道の宿駅や道筋沿道は、多くが津藩藤堂領の領地であり、藤堂藩が行政・経済のうえで当街道を活用したことはいうまでもない。藤堂藩は伊勢国の津に本城をもつとともに、伊賀国上野にも支城をもつ。伊賀上野城には城代が置かれ、伊賀国とともに大和国・山城国の藤堂領すなわち城和領の支配にあたっていた。歴代の藤堂藩主およびその家族一族は、在国時には津城に入城するだけでなく、伊勢国から伊賀国へも入って伊賀上野城にも入城したりした。これを藤堂藩では越国と呼び、津から長野峠越えで伊賀に入るいわゆる伊賀越道が多用されたが、用向きによっては加太越奈良道を通って伊賀・江戸へ往来したり、とくに伊賀上野を経て奈良や京都へ出る場合には、当街道を利用している[4]。

そして幕末期に京都が政治の舞台になり、あわただしい政治情勢のなかで藤堂藩にも軍勢の催促や用務命令が下されるようになると、当街道では京都へのルートとして上野以西に負担が激増している。『島ヶ原村史』第四章第三節「伊賀川と宿場町」には、この間の事情が詳述されているので、同書から嶋ヶ原宿での要点を紹介しておこう。

（1）元治元年（1864）7月25日、藤堂主膳が嶋ヶ原にて休息、人数922人
（2）元治元年9月10日、藤堂高潔が京よりの帰路休息、人数621人
（3）元治元年9月15日、藤堂新七郎が西宮へ出陣途中休息、人数364人
（4）元治元年10月15日、藤堂主膳、帰藩の途中休息、人数484人
（5）慶応元年（1865）4月17日、藤堂多門が西国出陣の途中休息、人数508人
（6）慶応2年5月14日、藤堂玄蕃、摂津山崎より帰藩途中休息、人数355人
（7）慶応2年5月16日、坂上弥左衛門方休息、人数430人
（8）慶応2年8月15日、藤堂出雲隠居帰雲衆宿泊、人数49人
（9）慶応2年8月16日、藤堂帰雲出張につき嶋ヶ原休息、人数1069人
（10）慶応2年8月18日、矢守太郎介・今村幸平・森島包之助衆休息、人数263人
（11）慶応2年8月20日、小西八十射ほか宿泊、人数65人
（12）慶応2年9月27日、藤堂金七、河内八尾より帰藩途中休息、人数不明
（13）慶応2年9月29日、藤堂玄蕃、帰藩途中休息、人数650人
（14）慶応2年10月2日、藤堂帰雲が帰藩途中休息、人数745人

以上は、元治元年から慶応2年までの嶋ヶ原宿場における藤堂藩勢の記録であるが、休息や宿泊をせずに通過した事例もあろう。休息の場合には、人数分の茶沸料と馬の飼料代は宿場へ支給されている。政治・経済の社会情勢などと、街道通行や物資の運送が密接に関連していることを読みとれる。

加太越奈良道の街道は、藤堂藩の御用だけに供される街道ではなかった。奈良興福寺の一乗院門跡や大乗院門跡が、奈良から江戸への往返に当街道を用いることもあった。また大和郡山藩主である本多氏や柳沢氏、大和小泉藩主の片桐氏など、大和の大名たちも江戸との往復に、

加太越奈良道を使っている[5]。たとえば、『庁事類編』寛政5年（1793）5月19日条には、「松平甲斐守様、嶋ヶ原御泊、上野御通、御下向之事」という記載につづけて、「近年御上下とも嶋ヶ原御泊に相成、迷惑之由ニ付、御往来之内一度ハ、上野御泊ニ相成候様、右宿より郡山江相願度旨申出候段」[6] などと大和郡山藩主柳沢氏の参勤行列が嶋ヶ原宿だけでなく上野宿泊りの場合もつくって、嶋ヶ原宿の負担を軽減するようお願いしたいなどという宿場側からの訴えが記録されている。

加太越奈良道は、東海道関宿から分岐して奈良とつなぐ近道として、それなりに宿駅も整えられた街道であった。弘化3年（1846）3月、奈良奉行に任命され着任の旅を東海道をたどって続けていた川路聖謨は、同道していた養父母・妻子・使用人らと関宿で15日に一泊したあと別れ、16日に妻子らを加太越奈良道経由で奈良へ向わせ、自らは鈴鹿峠越の東海道で一路京都へ向っている[7]。これは奈良奉行として京都の所司代や町奉行に挨拶してまわる用務があったからで、京都に立ち寄る必要がない場合には、加太越奈良道を奈良へと向うことが少なくなかったことをものがたっている。

京都に立ち寄る必要がない場合だけでなく、京都を避けるルートとして、加太越奈良道が利用された例もある。

幕末に来日したイギリスの外交官オールコックは、文久元年（1861）5月13日、大坂を発して加太越奈良道経由で江戸を目ざした。彼はその著『大君の都』で、「京都（ミヤコ）へゆくことは見合わせることを承諾していたので、京都を避けるためにまわり道をしなければならなかった。そのためにおそらくヨーロッパ人がいまだかつて足を踏みいれたことのない土地を通ることになった[8]」と、まわり道で主要街道でないという認識のもとに、加太越奈良道の通行を嫌がっている。大坂から奈良に入ったオールコックの一行は14日に奈良を出発し、笠置宿を通って嶋ヶ原に宿泊した。当初上野城下での宿泊予約が急に変更され、小さな集落である嶋ヶ原宿に宿所を変更されたことにもオールコックは憤慨して、相当な悪印象のまま加太越奈良道を通過して、東海道に合流して「われわれは通常のルートに出て、東海道のりっぱに砂を敷いた遊歩場のような道をすすむことができた[9]」と述懐している。

（三）加太・柘植・佐那具・上野宿と街道

関宿の西の追分けから、加太越奈良道を、奈良へ向って、平成16年8月から12月にかけて実地踏査をおこなった。

東海道関の宿場は、街道集落として整備・保全に力を入れていて、西の追分けも公園風な整備をうけている。この西の追分けには、元禄4年（1691）に京都の谷口長右衛門という人が建立した大石柱の道印が健在である。「南無妙法蓮華経」の文字の下に「ひだりハいかやまとみち」と彫られている（図1）。この道標に従って左へとる道が国道25号線であるが、旧道は現在の鈴鹿川にかかる大和橋よりさらに上流で架橋されており、橋を渡ると登り坂であったことが、「加太越奈良道見取絵図」には記されている。旧道が現国道とどのあたりで合流していたかは

不明であるが、国道に登り坂はなく、平坦である。

加太越奈良道は、加太川の下流から上流に沿う現国道25号線とほぼ重なっており、ＪＲ関西本線も国道25号線と同様、ほぼ加太越奈良道に沿いつつ、加太川の対岸にでたり、トンネルを利用したりして、鉄道という平坦路線の制約のなかで折り合いをつけている。

図１　関宿西の追分の道標

加太越奈良道の最初の宿場は加太宿で、関からは１里半である。関宿と加太宿の中間よりはやや関宿に近い位置に加太金場（かねば）という地名がのこる。ここは見取絵図に「鐘鋳場」と記されたところで、北側の山間の谷からは鋳鉄屑が出るといわれ、室町時代に刀剣を鍛造する製造場があったともいう[10]。金場のところでは国道から南へ入っていく旧道があり、わずかながら集落が残る。金場の旧道からは加太川を渡り南へ通じる道があるが、「見取絵図」（以下、略称する）に見える「村道、楠原宿江一里半」の古道であろう。加太宿の方へ進むと「見取絵図」に見えるホウソウ谷の地蔵も現存する。貞享３年（1686）３月吉日の銘があり、疱瘡退散の祈願がこめられたものと伝える。

加太の宿場は、「見取絵図」には字市場のところに「加太宿」の記入があり、柘植宿まで２里８丁の注記もあるが、市場には問屋場はあるものの、本陣は市場から鍛冶ヶ坂の峠をこえた西の板屋にある。宿場が峠をはさんで、東と西に分かれているのである。ＪＲ関西本線の加太駅は市場にあるが、名阪国道25号線のインターチェンジは、本陣跡のある板屋にある。現在も、市場と板屋の二カ所に加太の顔があることになる。ＪＲ加太駅の東側で旧道は国道25号線から別かれて北側に入るが、すぐにまた国道に合流する。しかし、また問屋場・高札場の跡から旧道は南へ入り、鍛冶ヶ坂の峠を下ってくるところで国道と合流するまで、古い景観の遠景も確認できる。旧道は市場の集落をすぎて加太川を渡ると登り坂となる。鍛冶ヶ坂は現在は梶ヶ坂と記されるが、地元の方は国道よりも近道のこの坂をたまに通行することもあるというが、道筋は峠の登り下りとも現在も残っている。

板屋の本陣跡のところで道は屈曲しているが、道の南側には「見取絵図」で平野大明神と記された神社や近くの権現社などが見えるが、いまはこれらを合祀した川俣神社が大きな社域を占めている。同社の石灯籠などに見える天和・貞享年間の坂久左衛門は、本陣・庄屋を勤めた家柄という[11]。

板屋をすぎると加太峠のゆるやかな登り坂で、峠の一ツ家の手前が、伊勢国と伊賀国の国境であり、ここには「見取絵図」でも境松が記されているが、現在はまったく旧国境をしのぶ景観はない。

一ツ家の旧道へは、国道からは断崖になっていて入れないので、大杣池のあたりから北に

入って旧道に出る。伊賀国に入った一ツ家からは下り坂で、北側には「見取絵図」に描かれた奇岩禿山の鷹山が見える。江戸期にはこのあたりで石灰を取っていたことが『庁事類編』などにあるので、そのなごりであろう。

ＪＲ関西本線に沿った国道が南西へ別かれていくところから、そのまま西進するのが旧道で、柘植宿へと入っていく。「見取絵図」は「伊賀国阿拝郡上柘植宿」と書いてある。「佐那具宿江二里八丁」と里程も示している。たしかに柘植宿の本陣は上柘植村にあり、宿場として町並を形成しているが、一般的な道中案内記や案内図では柘植宿となっている。ちなみに、中柘植村の集落は野村大師堂のさらに西、下柘植村は上柘植宿から３キロ以上西南に位置している。関西本線柘植駅にいたる南北路と当街道東西路の交差する四ツ辻からは一方通行で車では西行きに通行できない。柘植宿の本陣高札場の跡のすぐ西で、旧道は鉤の手に屈曲して西へ向う。同じように野村の大師堂でも道は鉤の手に屈曲するが、この大師堂の屈曲する四ツ辻の西南角（大師堂前）に、文政12年（1829）の道標があり、「是より北、いちいの道」と近江国甲賀郡櫟野村へと案内している。

柘植宿からは、柘植川の流れに沿うように西へ下るが、柘植川の土手を歩く位置どりで、旧道としての景観はほとんど残っていない。旧道は円徳院のところで柘植川を左岸へ渡るのであるが、現在は国道25号線の円徳院橋で渡るほかはない。国道から旧道の渡河点まで100mほど下って、佐那具の宿場町へと入っていく。

佐那具の地名は、古語の佐那伎（鐸）に由来するといわれ、隣村千歳村での銅鐸出土なども関連するとされるが、近世は宿場町佐那具として知られている。「見取絵図」には「高七百石、伊賀国阿拝郡佐那具宿」と記され、「上野宿江一里十五丁」との里程を示している。佐那具宿には宿場町の町並景観が残されているところもあり、本陣跡の旧家には雨どいに「本陣」の文字を刻むなど、家並みにも歴史を誇りとする意識がうかがわれる。佐那具の集落を出て南西へ進むと、条里制の遺構がよく残る水田地帯へと出る。旧道も町中の鉤の手の屈曲とは異なるが、条里に従って、南へ西へまた南へと直角に折れる。印代村のあたりはその代表的な旧道景観であるが、印代の青安寺、印代公民館の庭に建つ道標は、左へ行けば奈良・長谷・山上、右へ行けば東海道関を案内しており、嘉永３年（1850）の銘が刻まれている。

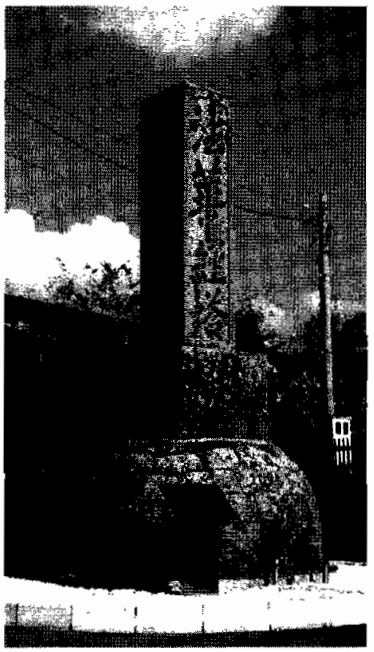

図２　安政大地震法華経供養塔

印代から南下して服部川を渡る。ここも渡河点は現在の服部橋より一筋下流で、かつてこの渡河点の服部川左岸に法華経塔が建てられていた。法華経塔は現在は服部橋を渡った200mほどの西側に移されているが、安政大地震の災害供養碑である（図２）。嘉永７年（安政元年）６月15日の大地震によって、当地方では前代未聞の未曽

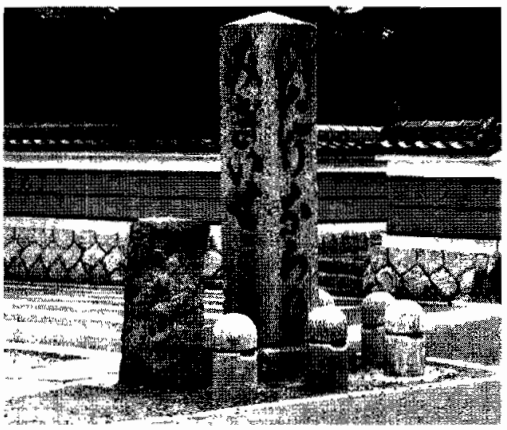

図3　鍵屋の辻の道標

有の大災害が起きた。この碑は被災者への供養の気持ちをこめて、法華経八巻を納めたものであるという。旧道は現在の法華経塔の西側にあり、南下して上野城下の農人町へと入っていく。

上野は服部川や木津川の低地流域よりはかなり高い台地にあり、城下町であるとともに加太越奈良道の重要な宿場町でもある。上野城下には三筋町とよばれる三本の東西路がある。一番北側の通りが本町通で東町・中町・西町・向島町の4町があり、街道はこの通りを東西に走っていることになる。本町通の北裏はすぐに上野城の外堀で、本町通の南には二之町筋・三之町筋の通りがあり町人居住区となっている。本町通の天満宮の西に本陣を兼帯する問屋場があった。中町には高札場があり札の辻とよばれた。旧上野市の道路元標もここにある。中町から西町のあたりは旅人宿が多かったと伝える。向島町の黒門が上野への西の出入口で、ここから幸坂の坂道を下ると馬苦労町の三叉路すなわち鍵屋の辻に出る。ここには、「ひだりなら道」「みぎいせミち」の文字を深く刻んだ道標がある（図3）。文政13年（1830）の仲秋再建とあり、すぐ横に文政以前と思われる小型の道標も並んでいる。このあたりは低地で水害の常襲地帯でもあった。

（四）嶋ヶ原・大河原・笠置・加茂宿と街道

鍵屋の辻から西へ、かつては町並みが続いていたが、たびたびの水害で明治初年から高台の上野町へ町ごと移住したという[12]。現在の木津川（長田川）に架かる長田橋へは車の道は少し南へ曲がるが、旧道はまっすぐ西へ川に突き当たる。このあたりはかつての船着場であったという。対岸の長田の市場地区には街道の景観が少し残っている。旧道の三叉路に「左なら道・射手八幡道是より三丁」の道標が建つ。市場からは西へ進んで国道163号線に合流し、そのまま国道に沿って三軒家までいたる。この間には昔の街道景観はない。

三軒家から水田のなかの道を西へ入ると、三本松峠へ向う山道となる。山道ながら旧道のおもかげを残し、あちこちの要所に史跡の案内板も設けられている。「春なれや名もなき山の薄霞」の新しい芭蕉句碑も登り口にあ

図4　三本松峠の長坂

るが、このあたりを詠んだものかは不明である。峠へ登っていくと、「お茶屋の井戸跡」があり、登りつめたところに「大神宮万人講燈籠跡」石碑がある。少し下ると三本松池で視野が広がるが、すぐに林の中へと下りながら進み、文字どおりの長坂となりハイキングコースのように心地よい旧道である（図４）。芭蕉が坂の途中で尻餅をついたというしりもち坂、藤堂氏にちなんだという与右衛門坂などを経て、長坂を下りきると佃の三叉路で木津川に突きあたる。旧道は川沿いに上流へまわり、現在の島ヶ原大橋よりさらに上流が渡河点であったという。嶋ヶ原宿は木津川の右岸で、街道の東側木津川との間に問屋場と高札場、西側に本陣があったが、今は旧本陣の看板だけは提示されている。嶋ヶ原宿の村高は1466石、次の大河原宿へは「一里半」と「見取絵図」は記している。

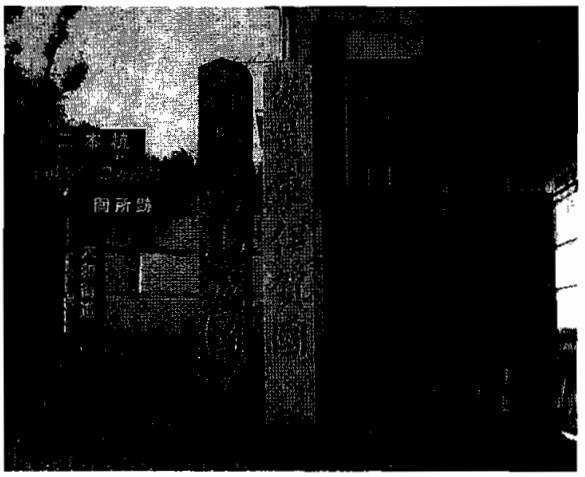

図５　旧伊賀・山城国境二本杭

旧道はいったん国道163号線に出て、すぐに国道のバイパスを横切り、伊賀七口の一つという山菅へと向う。伊賀国と山城国の国境は二本杭とよばれるが、文字どおり「従是東伊賀国」「従是西山城国」の二本の国境傍示石標がいまも建っている（図５）。ここからは山城国相楽郡南山城村で、下り切るとＪＲ関西本線の月ヶ瀬口駅の南へ出る。なお旧道は笠置中学校を南にまわりこむようにしながら、関西本線の線路に近づき、二ツ峠でトンネル入口と別れ、大河原へと進んでいくが、廃道に近い。

北大河原の中の町で国道163号線に合流してしまうが、渋久川沿いのこのあたりに「見取絵図」では本陣、問屋場、高札が南側に記され、「高六百八拾壱石余」「笠置宿江一里半」と記されている。笠置宿への道はほぼ木津川に沿うが、右岸の通行不能地は山中路となる。とくに有市に入り、横川をこえると、加太越奈良道中随一といわれる難所の登り坂笠置峠となる。「見取絵図」にも長い坂道を示す記号が見え、約１キロの登り坂、そして峠のあたり、また下り坂の旧道両側には人家が立ちならび、坂を下りきったあたりに、笠置宿の高札場・本陣・問屋場が北側に並んでいた。対岸には笠置山がそびえ、史跡と弥勒信仰の笠置寺がある。笠置宿は「見取絵図」では「北笠置宿」と記され、「加茂宿江二里」となっている。

笠置から加茂宿への旧道ルートは、木津川の右岸すなわち北側を通りながら、「見取絵図」では切山村の草畑の西の広畑で木津川を左岸の南側に渡っている。対岸は南笠置村の五軒屋で五軒屋の渡しともよばれた。五軒屋からは木津川の南岸を通り、加茂の船屋へと通じていたという。しかし、木津川の左岸はしばしば洪水の災害をうけ、とくに正徳２年（1712）の大洪水では加茂村の中心集落が高台の山沿に移転しなければならないほどの被災があり、街道も川岸から南の山間を通るルートにつけ替えられたという[13]。

五軒屋の渡しから西進すると通行不能なところもあるが、加茂の山田からは山間の谷筋道となり、旧道のおもむきを残しながら、藤堂高虎供養碑も南側に確認され、新川のあたりで加茂宿の本陣跡に達する。橋の西詰には天保13年（1842）建立の「左いがいせ道」「右なら道加茂大明神」の道標がのこる。

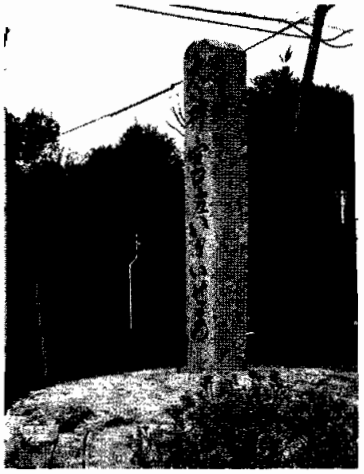

図6　緑ヶ丘浄水場内の大神宮道標

加茂宿は新川を渡って、現在の関西本線の線路を越え、西へ進んで船屋の町並みへと入っていく。問屋場は高札場の向いにあって、船屋の町が突きあたり直角に南進する屈曲の北側、すなわち木津川河岸に乗船場が「見取絵図」に見える。加茂宿から奈良までは「貳里半」である。船屋から南進し、また鉤の手に屈曲しＪＲ関西本線加茂駅の西で線路を渡ってさらに南進したところが里の集落である。ここは正徳２年の大洪水のあと船屋から移住したところである。

加茂を出て奈良への旧道は、里の集落内を西へ折れ、線路沿いまた赤田川沿いに南進、南加茂台のニュータウンの西で高田の集落の中へと入る。高田の集落をすぎると、旧道西側に「南無妙法蓮華経」と書いた題目石がある。道は奈良加茂線と合流し、高田西口のバス停があるが、そのまま南進する登り坂へ行くのが旧道である。茶畑が広がる農道になっているが、これを登りつめると「おかゆ峠」と俗称される峠に出る。文四郎という男が、旅人にお粥を売っていたことにちなむという[10]。

この峠は切り通し状に旧道の跡があり、木津町と加茂町の境界ともなっているが、現在は金網が高く張られ、加茂町側と木津町側の往来は閉ざされ、通行不能である。木津町側にも旧道のあとは残るが、山間を出ると崖になっていて、上梅谷の農地に降りれば上梅谷の集落には出ることができる。上梅谷はおだやかな農村景観の集落である。

上梅谷から南下すると、奈良市の緑ヶ丘浄水場に突きあたる。この浄水場には安永２年（1773）建立の「太神宮左いかいせ道」と刻んだ高さ３メートルの大道標が建てられている（図６）。このあたりが山城と大和の国境であった。奈良からこの加太越奈良道を進んできた人には、伊賀・伊勢を案内する大きな目印であった。浄水場北側の道を西へ向って、新しい青山住宅地をまわりこむように進むと、京都と奈良を結ぶ街道の奈良坂に合流する。

奈良坂から奈良へ至る町並については、別稿奈良大学総合研究所特別研究成果報告　奈良街道（京街道）の調査研究と重複するので、譲る。

［補註］

1）吉川弘文館刊『日本交通史辞典』収載「五街道分間延絵図」（児玉幸多氏執筆）による。

2）『庁事類編』（上野市古文献刊行会刊、昭和51年６月）の享和３年正月26日の記事に「五街道分間絵図仕立之儀ニ付、従公儀御勘定役等被相廻候段申来候事。右被相廻候節御取斗ひ振、四月之所ニ在之」とある。関連記事は４月にはなく、５月15日、７月朔日などに見える。

3）「加太越奈良道見取絵図」（児玉幸多氏監修、久保文武氏調査・執筆）は平成10年５月、東京美術社から刊行されている。
4）『島ヶ原村史』（昭和58年刊）。ｐ304～ｐ307参照。
5）『島ヶ原村史』ｐ290～ｐ293参照。
6）『庁事類編』（同前）ｐ360。
7）『川路聖謨文書（二）』（日本史籍協会叢書59）「寧府紀事」弘化３年３月16日条から同19日条参照。
8）オールコック著『大君の都』（岩波文庫・出口光朔訳）文久元年５月13日条
9）同前、文久元年５月16日条。
10）「加太越奈良道見取絵図」（巻１上）解説編ｐ９参照。
11）同前。ｐ15～ｐ16参照。
12）同前。ｐ58参照。
13）『加茂町史第二巻』（平成３年刊）ｐ267～ｐ268参照。
14）同前。ｐ261参照。

付言

本論は、平成16年度奈良大学総合研究所研究助成金の交付をうけた研究の成果である。